

# 碩心

社団法人 日本詩吟学院岳風会 認可  
神奈川 碩心会 発行

現在 会員 数  
元 年 10 月 164 名  
返 子 地 区 260 名  
葉 山 地 区  
大 船 地 区 44 名  
( 合 計 ) ( 468 名 )

元 年 10 月 号 ( 207 号 )  
発 行 者 萃  
根 岸 岳 集 者 岳  
中 編 村 愛 岳

## 高令者の表彰を戴いて

大船B支部 森田嶺岳

詩吟の教場に通り出してかれこれ二十数年になろうとしております。それなのに上達の遅さに自分ながらあきれ毎日で。残暑去らぬ九月十七日、神奈川県本部創立三十五周年記念大会が、横須賀文化会館で盛大に開催されました。その折、式典の中で高令者表彰があり、今年満八十才になる者を対象とした、五十一名の中の一員として、私も表彰の光栄に浴しました。心から感謝申し上げます。

今更ながら吟の道を志して本当に良かったと思ひ、これからも健康に留意して、後進の指導に、又会の発展の為尽くしたいと思ひます。今後とも先生方の御指導と御鞭撻の程お願い申し上げます。高令者表彰に臨み、一言御礼申し上げます。

## 若葉支部この一年

若葉支部 佐々木邦泉

千葉劔岳先生の許に発足して、すでに一周年が過ぎた。楽しく充実した一年であったとはいえ、支部の平均年齢七十三才、加

えて吟歴の浅い私共を教え、且つまとめられた先生のご苦心は察するに余り有る。

この一年、先生ご自身の、貪欲なまでの勉強が、即教場でのご教示となった。始めは、基本をこれでもか、これでもかと叩き込まれ、続いて拝聴したこともない難しい漢詩・和歌・俳句・新体詩・果ては韻讀まで指導されて、さすがに回転の鈍った頭に困惑した事も事実である。けれどもやっと先生の真情が判って来た。究極は「人生限り有り」である。

吟歴幾十年もの先輩、諸先生方の中に在って、高令となって吟道に巡り会えた私共にも、一歩でも前進させてやりたいとの先生のご厚情ではなからうか。誠に有難いことである。

この度、横須賀第二地区長に選出され、榮進された千葉先生の益々のご壮健を祈りつつ、私共も益々精進せねばと心を新たにす。皆様よろしくお願い申し上げます。

## 贈 位 (平成元年七月一日)

宗 佑 加 藤 岳 相

## 総伝位昇格 (平成元年七月一日)

総伝・岳雷 沼 田 利 光

地区長に (平成元年八月一日付)

横須賀第二地区長 千葉 劔 岳

奥伝合格 (平成元年十月一日)

257 徳井直風 259 木内江風 261 加藤祥風  
263 新倉春風 264 嶋津幸風 267 新井衛風  
269 川口喜風 513 鈴木深風

◎ 行事予定

◇第23回葉山町文化祭 十一月三日(祭)

詩吟詩舞の会 葉山福祉文化会館

◇第39回逗子市文化祭 十一月五日(日)

詩吟詩舞発表大会 逗子図書館ホール

◇県本部高段者(八段) 十一月十九日(日)

審査課題講座 平塚農業会館

◇県本部高段者(皆伝以上) 十一月二十三日(祭)

審査課題講座 9時受付・9:30開始  
平塚農業会館

※ 講習料千円、吟道手帳持参 弁当自前  
不参加者は根岸・加藤(相)先生へ連絡

◇県本部 十一月二十五日(土)

納吟会・理事会

横須賀第一地区

田原坂秘唱

幻のごと眼に浮かぶ丸に十字の旗哀し  
銃火の音に耳かせば悲風千里の田原坂  
討たれし者も討つ者も今は眠れる塚の下  
月しろ淡く秋更けて露も涙の田原坂  
田原坂は入り組んだ要害の地で、当時の  
政府軍の従軍記者は「急登りの長坂で、中  
腹で屈曲し、坂の西側は、断崖の谷で樹木  
が茂っている。この険の突角の所を選び、  
薩軍は砲壘を二重にも三重にも構え、土俵  
が間に合わない部分は、百姓が貯えておい  
た、粟や麦の俵を運んで積み上げた」と書  
いている。  
この田原坂に政府軍が押し寄せて来たの  
は三月四日の早朝であった。野津、大山、  
三浦の各将軍が、それぞれ第一、第二、第  
三の軍を率いて攻撃した。銃撃戦の合間に、  
薩軍は抜刀隊を組織して政府軍の陣地に殺  
到した。一進一退の攻防戦がつどき、政府  
軍はどうしても田原坂を突破できなかった。  
田原坂の戦いには雨の日が多く、緒戦か  
ら陥落までの間、完全に晴天の日は少なか  
ったという。雨天の中、両軍はずぶぬれに  
なって戦いつづけた。だが雨は薩軍の方を  
より多く苦しめた。のちに首相となり、五

・一五事件で斃れた大養毅は、二十三才の  
時にこの戦いの従軍記者であって、その時  
の報道の中で「薩軍兵士の間は、苦手は一  
に雨、二に赤帽、三に大砲であるという者  
があった」と伝えている。  
しかし三月二十日早朝、政府軍の一隊は、  
折からの霧にまぎれて薩軍の背後に忍び寄  
り、奇襲攻撃をかけた。この不意打ちにさ  
すがの薩軍も大混乱に陥り、必死の攻防も  
空しく潰走した。  
かくて十七日間に及ぶ激戦は終わった。戦  
の終えた後の戦場は「溝には鮮血湛え、畠  
には死屍横たわり、満目の樹木弾痕蜂巣の  
ごとく、地上の遺莢積んで堆となす」……と  
いう凄愴さであったという。  
そして西郷は、郷里鹿兒島に帰り、城山  
に籠って、半年後の九月二十四日、城山で  
自刃、時に年五十一才であった。  
いま田原坂の丘に立つ崇烈碑は、田原坂  
で死傷した官軍将兵四千人を讃えているが、  
実際は七千人を越えるといわれ、薩軍もそ  
れに近いといわれている。それにしても、  
官軍墓地は個々の名が刻まれて、整然と並  
んでいるのに、薩軍墓地は三百余名併せて  
ただ一基、畑の片隅にボツンと置かれてい  
る。勝てば官軍、負ければ賊軍は、死して  
尚つづいているのである。(秋元梁岳記)

# 鏡を覽て老いを喜ぶ

白 居易

今朝明鏡を覽るに  
 鬢も髪も尽べて糸と成りおわんぬ  
 行年は六十四  
 安かてか衰え麻せざるを得ん  
 親屬は我が老いたるを惜しみ  
 相顧みて歎容を興す  
 而して我は独り微笑す  
 此の意を何人か知る  
 笑ひ罷めて仍お酒を命じ  
 鏡を掩いて白き鬢を捫む  
 爾輩且つ安らかに坐し  
 従容として我が詞を聴け  
 生を若し恋うに足らずとせば  
 老いも亦何ぞ悲しむに足らん  
 生を若し苟くも恋う可しとせば  
 老いとは即ち生きて時多きなり  
 老いざれば即ち須く天すべく  
 天せざれば即ち須く衰うべし  
 晩く衰うるは早く天するよりも勝る  
 此の理は決して疑わしからず  
 古人も亦た言えること有り  
 浮生は七十なること稀なりと  
 我は今それに六歳を欠くのみ  
 幸い多ければ或いは庶幾うべし

尚し此の限りに及ぶを得ば

何ぞ榮啓期を羨まんや

当に喜ぶべく当に歎くべからず

更に酒一壺を傾けん

◇作者の「閑居」の啓学をのべた詩。

◇用語解説・明鏡Ⅱよくうつる鏡。行年Ⅱ

現在の年。歎容Ⅱためいきをつくこと。

従容Ⅱゆつたりと落ちついたさま。恋う

Ⅱ執着する。天すⅡ若死すること。浮生

Ⅱこの世。榮啓期Ⅱ人の名。一壺Ⅱいっ

ぱい。

## 柿の実に思う

中村 愛岳

記録的な残暑もようやくおさまり、ぬけるような秋空のもと、柿の実がそろそろ色づきはじめました。

柿の実といえは、私達夫婦は今でも、赤い柿の実の絵を焼き付けた湯呑茶碗を、大事に大事に愛用しています。それは堀内支部十周年記念大会（48年4月8日）の折の記念品です。数えてみればあれから十五年余りの才月が経ったのかと思うと感無量で、過ぎ去った日のことどもが、次から次へと浮んできます。

私が堀内支部へ入会した頃の支部会員は

五・六名だったと思います。私は詩吟というものを何も知らないまま、会員増加の為、誘われるままに入りました。消防団詰所での練習風景、入って間もなく、娘の担任教師の送別会に、入会間もない私が、こわいものしらずで、習いたての「ひえつきの歌」を吟じたこと。それが御縁で元教師の石木先生が入会され、そして一色支部が発足したことなど思い出されます。

その後おせっかいやきの女性陣の入会により、堀内支部は会員増加の一途を辿り、会員も五、六十名となり十周年大会を、葉山の旧福祉会館で開くことになりました。その時の支部長加藤例風（圭岳）副支部長中村愛風（愛岳）のコンビで、根岸先生を相談役にいただき、加藤先生の微に入り細に入り綿密な計画のもと行われ、新田先生、岡嶋先生他をお招きして、盛会に終ることが出来ました。

当時のプロに目を通しますと、がらりメンバーが変っているのに驚かされます。そして黄泉の国へ旅立たれた何人かの方々：懐しい顔が浮んできて、才月の流れを感じ感無量の思いです。

これからも私達夫婦は赤い柿の実のついた二個の湯呑茶碗を、末長く愛用し、堀内支部の益々の発展に託したいと思います。

練吟  
メモ  
さもあらばあれ

○筆者が少年の頃、意味不明ではあるが、「ベンセイシユクシユク」と「さもあらばあれ」という言葉のあつた記憶がある。詩吟に入ってから、もちろん血となり肉となつてしまつた言葉である。しかし、「さもあらばあれ」は観念上ではわかっているが、いざ詩文を含めて解釈してみなさいと言われるとうまく説明できない。分つていようでなんとなく分らない言葉である。

○遮莫(さもあらばあれ)は、中国の唐代以後の俗語(あまり使われない言葉)である。もちろん音読は「ジャバク」で(さもあらばあれ)は訓読である。辞典類はほとんど同義で(然も有らば有れ)の意で(ままよ)(どうあろうとも)(不本意であるがそのとおりにして置こう)などと解する。

○霜満軍管秋気清 数行過雁月三更  
越山併得能州景 遮莫家郷憶遠征

謙信は和歌は堪能で京都まで知られていた。漢詩はこの一詩しか世に残されていないので、謙信の作かどうか疑問視する学者があるが、謙信ほどの学才があれば疑う余地はないとされている。しかし、この詩は世に出してから二五〇年ほどの間に一五回詩句が

変更され、頼山陽によって定着(新たに添削した所はない)を見たようである。

○詩語の更改のうち「霜は軍管に満ちて」が(九月十三夜では能州の霜は時季尚早が理由で)「露は軍管に下りて」とか「露は軍管に満ちて」とか、その他細かい更改はあつたが、最も数の多いのが「遮莫」である。「遮莫」のほか「任佗」「任他」「不管」(以上いずれもさもあらばあれと訓ずる)等が、軍記物や詩史類の発刊されるたびに更改されたが、結局、山陽の日本外史から「遮莫」に定着したようである。

○教本では、吟詠に適するよう「遮莫家郷遠征を憶う」と訓読している。一般の漢詩参考書には「遮莫家郷遠征を憶う」とか「遮莫家郷の遠征を憶うは」とかの訓みとなつている。どちらかと言うと「遮莫」との関連では一般参考書の方がわれわれには理解しやすいと思われる。すなわち、通釈は「ままよ、故郷の家族たちが、きつとわれら遠征の身を案じていてくれることだろうが(今宵はそれを忘れて、この名月、この夜景を心ゆくまで眺めようではないか)となり「ままよ」の後に( )書の中の詩文にない言葉がつけ足される。これを十分理解した上で「家郷遠征を憶う」と簡潔に訓読しても意は十分通じると思う。

(訂正)

9月号会員数葉山地区258名を256名に  
退会110行谷佳風(平松)を(逗子A)に

(入会)

- 542 大貫フデ子 横須賀市池上六一二
  - (唐木山) (電)〇四六八一五三一八六九八
  - 543 坂本朝子 葉山町長柄一四六一一〇六
  - (一色A) (電)〇四六八一七五〇七七八七五
  - 544 平岩豊子 葉山町一色二四二〇一八
  - (一色A) (電)〇四六八一七五〇一六三一
  - 545 竹下房江 葉山町長柄四九八
  - (上原) (電)〇四六八一七五〇二一六八
  - 546 原二郎 横須賀市武四一三三三
  - (唐木山) (電)〇四六八一五六一八八六八
  - (退会)
  - 454 石川忠義(唐木山)
  - 317 仁木鶴山(逗子A)
  - 285 柴田操山(逗子A)
  - 316 長谷川桃山(逗子A)
  - 366 大野恵山(逗子A)
- 白樺・ブナ・ナナカマド等が色づきはじめ、山頂では一部紅葉が始まつたとか。紅葉の色がよくなる条件は①昼と夜の温度差が大きい②紫外線が強い③適度の湿度がある。といわれ、今年の色づきはまずまずだそう。十月中旬から十一月中旬にかけて山を彩る鮮やかなもみじの錦が楽しめそうとのこと。